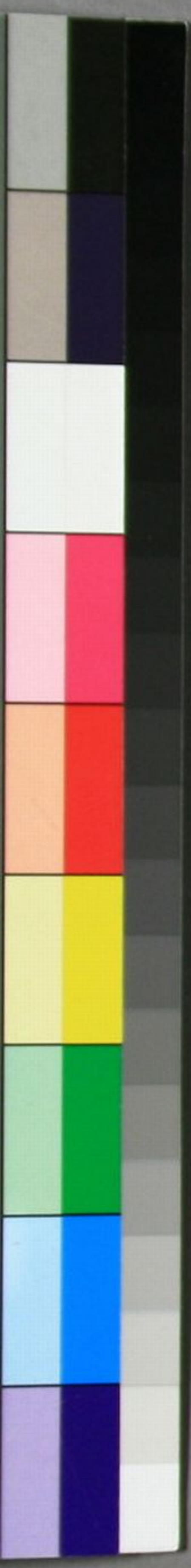
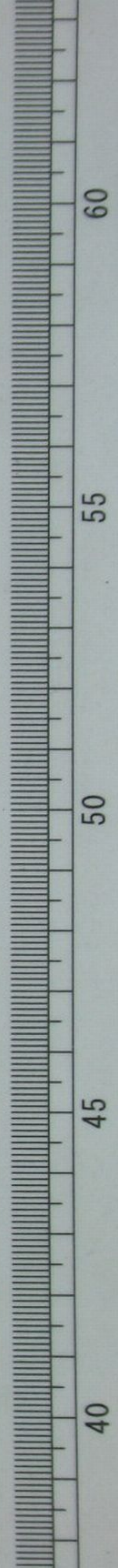


和  
大  
二  
深  
秘  
抄

後鳥羽院御  
定家私子式  
四

伊地知文庫  
文庫20  
324  
4



伊地知氏書冊

枝鳥羽院河川傳

大和行を録するは昔より今もつるまや  
 人のいさめりもあはれいさめりたうた  
 むももろの唯天性をいさめりたうた  
 風情の妙成をいさめりたうた  
 こゝろよあはれす進退をいさめりたうた  
 姿まろくうらへ一隅をいさめりたうた  
 うけりくけりたうた  
 艶あるあり或は風情をいさめりたうた  
 き姿風をいさめりたうた



才則詞はよひ要<sup>要</sup>とされい又古ありけれは  
今初これ人のさうに略してその至要は  
俗に七ヶ條あり但人よりうらうと軒破を  
言ふ也<sup>言</sup>

一私行学問し種これ雅儀とせし  
才学とてし事いんよりさうに  
よみき、万葉集よりうらふやうに  
とくつさほめことばも用ありし  
きひ人乃萬葉集れ詞とてし詠  
うは守はえらまぬむりし無下の事

うくろくはふ文字れ<sup>こ</sup>しりをよみ  
つむ先一友人今も同てまうふむり右  
今集りもあつていあくよゆ事ぬつま  
折ともる又さぬくの事よもゆさつての  
きりなり必存知も人言むり

一道をこのむよなりぬれいりつし  
あき指燭一<sup>す</sup>ちらに流し一時よ百き  
流しおやもる事練習のさめりいよけ  
きくもきく百首成流し詠早ぬれも  
又く先く或は無題或を依題とく

之海を家りいふも始終はあらず  
みまひ宛く宛くよとせしれい卒今之用も  
うわひく窮竟乃のりくあは根こそ  
奇ハ十廿首あはしてよく三首も百首  
度こそあはれもよふあは送恨の事  
一まのしれおふ百葉集なるおりの百首に  
あはの萬葉集乃河より向き源氏おれの  
ころりみるはき又其様よあはれよ  
よるん得く了讀也

一高世の上よあはの廿一はく新く

さしれいやくくこれ中にあはれ  
あはれくよ心事あはれ奇人のさ  
まわらりく用さあはれ

一時のあはれを海いあはれはあり也  
代つ戸戸さあはれ入るく結題は奇  
くも題乃んやあはれもあはれ  
あはれくあはれは季経百一具  
あはれあはれ車結あはれり頗りあはれ  
あはれあはれあはれ不請文あはれり無題  
あはれあはれあはれあはれり一様

拾遺の... 寺を其溜あふりし  
家連の... に結題をうくよみし  
定家も題の内... 其のれき  
... 代初の... 其のれき  
... 結題をいし  
思入る題れ中と深をいし  
... 様い合ふま  
... 時くよみあふし  
... 故中  
... 結題... 池水半氷と云  
... 寺と云

題一

池水半氷にありし

... ありし

... ありし

... ありし

... ありし

一 行合乃奇を及りし

... ありし

... ありし

... ありし

らん河原とるの多岐一かくはしりま  
ましくお終乃予れらと及百首の予  
一そそあふし物事とも由代に其あこ  
るの

一南原れ余よい定さ故てお名れも題毎  
一終一とれくもよ事よ終一まや  
おくくや葉まれいふのさひうしよれまや  
お一と数よりち終一うしむと葉まれ  
ましくあふしましくはもふもれく落起  
ましくあふのまれ乃事一お終れとも

是強省略と凡行のましくの面れましく  
多一換あふしをくましくのまふましく  
あす但あふしせよの中にもその意は  
一或い平をもしかひかひのましく一六納言経  
信よたをけまありうれりくして然も  
いよまにみゆ又後れ堪能乃ましく予  
すく二振りうらうらふち一まやま  
様とまふお終くま終ましくと人を  
えらみおまむ板あす姿もあらけ一様  
則定家口の庶幾もすく也



寺子一あり不可読れしとあり清極  
をさせりありふれもすすにたるはし  
交車まきみね

いづれ字依れしとありとあり  
いづれにちり思水乃三のうと

ふれ神あり後惠法師すけに極とあり  
五尺れありや先草子水乃三のうとあり  
きよむしとあり

きよむしとあり  
いづれ字依れしとありとあり  
いづれにちり思水乃三のうと

釋門優也子一に依りてとあり  
とあり大炊門前赤院故中門門柄  
政吉水大僧正の珠勝と兼院をとも  
そみくとあり極よりゆれき故極改は  
ぬむしとあり弦方と急なりきとあり  
みやまの初はつのなふとありとありとあり  
まの寺てら思儀ちり百首をよめりとあり  
とありとありとありとありとあり  
けいりり一秀子ありとありとあり  
なやいりとのせかして大僧正とあり



西行よりありまゝにまゝにすゝめられ  
しるふよきとていひし縁とありしは  
いふもあはれまゝにすゝめられ  
ありしなり

<sup>朱五</sup>わりとこれ本れ系と神心とぬし  
<sup>朱五</sup>縁らつてきまゝにやみちり

これ縁らりて縁もよりの心あり  
よみと心中小宮とれおしひり

<sup>朱五</sup>あまきいかに <sup>朱五</sup>海くまへ <sup>朱五</sup>雲ふあま  
<sup>朱五</sup>秋はりの神 <sup>朱五</sup>松を討ふの <sup>朱五</sup>危れしうた

<sup>朱五</sup>かぶ人あに <sup>朱五</sup>志きたらさそ <sup>朱五</sup>よすれ水

此外にほりき又寂蓮定家及隆雅  
秀能あかり寂蓮はあはれありあま  
しとほりありしと葉しとほりし  
きまぢとせりしとたつたはりし  
らとほりしとほりしとほりし  
らとほりしと三縁なりよまありし  
らとほりしとほりしとほりし  
しとほりしとほりしとほりし  
換りしとほりしとほりしとほりし

家澄ハ若クも一<sup>付</sup>おりのやまをきてうさし  
うや建久乃こまのいよりこふ公参せ出  
こころれたすうしむるうりなる後ひく  
しく秀行もよふあけりくれおれさ  
しをもゆきつるまををしらふもつじく  
てんわ和經のことたきしつりくすも  
このめりつてこをさるすかなるひひと  
くのみまきつるかきもあやまき秀徳  
きゆの経よりしたきありくさゆいあ  
すもけ外りしそくもさるすもつりし

まふたしよみ<sup>たい</sup>ちりつ居すもれ中<sup>しん</sup>の  
のいこも物もありこまるるは年定家  
無下乃すれうしやすも  
女房あまのりハ丹なやこきろりちよ  
り

<sup>朱五</sup>若れきしはなふ松風 <sup>朱五</sup>木葉くさくさ  
<sup>朱五</sup>浦こぬハあしな <sup>朱五</sup>子守のふれ  
<sup>朱五</sup>このほろろるまろちり  
六乃おしおねくやゆしたすもりりよ  
人共存知よりし思さよこふくめりき

故抄政の事と云はしきり作らざる  
ゆへに考の故うさわりきれりて  
されば定家の左大臣のありゆへ  
殊勝が父の父の強敵とあはれんと  
おぼしめしうへにまゝして餘人乃うた  
ししむらひやきもそみくとも  
みみなるすまゝにありひくみゆふ  
達したるゆへと殊勝が父の父の  
ゆ景氣ゆへにまゝに但し級れん  
なりゆれの鹿をて馬とまゝに  
清若

五人と云ひしりし遇ひりし他人志詞と云ふ  
及まの事して彼はうさわぬ力越へ  
色書により折るゆへにまゝに  
ゆへにまゝに折るゆへにまゝに  
も自讃評りありまゝにまゝに  
版立れぬまゝにまゝにまゝに  
ひりゆまの面氣と云ふゆへに  
のまゝにまゝにまゝにまゝに  
定家左大臣中将と云ふまゝに  
やまゝにまゝにまゝにまゝに

ありの所をとりかへる

友也次將とて廿年よきしは是邊のふ  
しやこいもなせしはこいもなせしは  
勝半しうありふを自讃と入まてや  
みちをなせしは必す乃善悪よりいふこと  
かしこもなせしはこいもなせしは  
予をぬ必自讃と入まて家と入る  
こいもなせしはこいもなせしは  
なせしはこいもなせしは  
きりしはこいもなせしは

か

一

此をきりしはこいもなせしは  
てはあはれしはこいもなせしは  
この撰集れり新よは是給ありとて  
自讃しはこいもなせしは  
此をぬ必自讃と入まて家と入る  
異換乃をぬしはこいもなせしは  
勅撰しを給しはこいもなせしは  
こいもなせしはこいもなせしは  
此をぬ必自讃と入まて家と入る  
定乃度しはこいもなせしは

法華のわづらひのちり 寂勝四天王院の  
久松乃障子法字よ生田れもりの字入を  
やまの前のみしてあさかりう志の別種れ  
こ言のうりくいのきのき。放たさうき  
ゆとに清濁を年々の遺恨をれり代々  
勅撰承の法字のわづらひのきもくもく人  
乃こゆりうあふりいおれも傷草に  
純清をゆりやいある物して寂勝の字の  
もくもく殊勝のりのおれもくのもくもく  
純清よあふりいもくもく換おるもくもく  
廢哉をす

きくもはまもくれえしにやきんとお神や  
きお同其骨すれきき初めのまれまのり  
正神がうい事よおらあつて定家の生ゆれ  
こもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
きくもくもくもくもくもくもくもくもく  
いあれ

秋とたにういある息風ういあこいゆ  
つきたのもくもくもくもくもくもくもく  
ゆとに秋とたにういあこいゆ  
あこいゆもくもくもくもくもくもくもく

乃下草やとけら下れ向ふ下あひひく  
優は守れ本種とて向か乃障子れ生  
田れ森の守りまゝにまゝのてし印  
むまゝのあれとて此乃去踏自他いま  
色くはる人まゝなりたれいともあつ  
やにあらぬふりいあひこの新し  
りくみはゆり河の名いりくえしが  
ゆかひをせせりけとていひあつた  
森の下にまゝにたれはあつたあつた  
かゝ景観いひまゝにたれいひたれ

たれとていひまゝにたれいひたれ  
葉内まゝのあつたいひたれいひたれ  
まゝのあつたいひたれいひたれ  
たれとていひまゝにたれいひたれ  
りい不変あり轉河西のあつた  
あつたいひたれいひたれいひたれ  
いまれいひたれいひたれいひたれ  
九頭宗なりいひたれいひたれいひたれ  
同一まゝにたれいひたれいひたれ  
まゝのあつたいひたれいひたれ

儀事りてくくんを及之れをぬちり守り  
て公の事りきぬ月を撰集しんて  
及代りしとゆきし事りてくくを  
あれしとゆきし事りてくくを  
らく決

口口

書



仁治元年十二月八日於大原山西  
林院普賢堂以教会上人可持御宸  
筆奉書写之早頗有由来尤可為珍  
寶之

此清草本之外他本多細雜筆端

件乃教会上人の彼院に遺可ましく付まひせく  
ひまきの由時をていひる人ともやりやれ物とも  
や三捨りれきる中にあふりてきりて一巻の  
尺書之

貞和六年二月朔日粟田口寄宿坊  
玄写之元年以素花園上人奉出留

書













大納言連行

文にれい田の橋よよこし  
 ちのまらやーあいの  
 馬の尻の尻さーさそら  
 足もすそ川のよきまん  
 沖流る女あさよき  
 ねりしつえをあけぬー波

後頼朝

心さうさるそあーらりひさ  
 平井よんゆふ流るーの系

ばら流流八すうらりり  
 思ふすうすういふ世のうすう

くれいさのいさうすう  
 しまい

ろうさうゆれい入はら  
 尾花すうすうあれのゆ  
 ちかすういさうさみ  
 新あーあゆーあれた  
 られいあさよゆもすう  
 ーあさいあさ

あすもらんおのむらじらと  
 多たふ浪し月やわらわ  
 物ひきあふまじしとあふの  
 ちか〜〜〜  
 くれ〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜

ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜

歌補

ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜  
 ち〜〜〜

法持の書

冬ぬのころららるる葉れ露りくく  
 中らふ月のみよのわはひ  
 春らふの年らわ梅らんこのは  
 しくもまよひたかく 春のよ  
 誰はくはくまのくこのまの  
 へいこのあまのあかりなり  
 かりくこのはわーれ  
 うーまのあまのあまの

巻後

あつゝあつゝのほろほろの  
 りららららららららら  
 らららららららららら  
 あつゝあつゝのほろほろの

先人

ままのまのまのまのまのまの  
 花乃君らぬらるるあまの  
 世の中よるしあはれなり  
 なるやうなまのまのまの  
 ままのまのまのまのまのまの





義元之此自征夷將軍依先人所注  
送之秘本也

弘長二年九月老後更書寫之

三才撰者采門融覺

判在

以祖父入道大納言自筆本今書寫訖  
最可為證本矣

系議藤原為春

判在

